

ホテル稼働率 上昇一服

昨年、東阪で前年下回る

東京と大阪の主要ホテルの客室稼働率の上昇に一服感が見られる。2016年の平均は東京が83%、大阪は89%といずれも前年を下回った。年間の訪日外国人客数は過去最高を更新したが、一方でホテルの新設ラッシュや「民泊」など他の宿泊施設の増加で供給余力が高まったことが背景にあるとみられる。

客室増や「民泊」台頭で

日本経済新聞社がまとめた16年の東京都内の主要18ホテルの平均客室稼働率は83・0%と前年比1・5%低下した。18ホテル中13ホテルが15年の



大阪の客室稼働率は5年ぶりに低下した (大阪市内のホテル)

込むことには成功したが、客室稼働率は83・2%と0・7%下がった。

帝国ホテル(東京・千代田)も76・2%で1・8%低下。夏の観光シーズンに日本から海外に出かける旅行者の増加が影響しているという。

大阪市内の主要12ホテルの平均の客室稼働率は89・1%と15年比1・3%下がった。前年割れは5年ぶりだ。

帝国ホテル大阪は法人向けの報奨旅行は堅調だったがレジャー需要が減り、16年は82・2%と3・8%低下した。シエラ

ン都ホテル大阪は稼働率は9割前後で前年より5%程度下がった。訪日客による宿泊需要が過熱した15年の水準で料金を設定したが団体客が振るわなかったという。レジャー客の割合が高い大阪では、訪日団体客の減少も個人客で補えなかったことも影響したもようだ。

16年の東阪主要ホテルの客室稼働率は80%を超すなど、水準そのものは依然高い。ただ上昇に一服感が見られる要因として、ビジネスホテルの新設ラッシュなどでホテル全体の供給能力が大幅に高まっていることがまず考えられる。

国土交通省によると昨年の宿泊業の着工床面積

は約196万平方メートルと前年比2・1倍となった。18年ぶりの高水準だ。主要ホテルが強気の価格設定をしたことと相まって、国内外の観光客が格安ホテルに流れているとみられる。

空き部屋を有料で貸す民泊が、急増する訪日客の受け皿になっていることも考えられる。民泊分析会社のほうず(東京・渋谷)によると、民泊仲介サイト「エアビアンドビー」の掲載物件数は都内で1万6千超、大阪府内は1万2千超。大阪観光局の調査では大阪に来る外国人観光客の57%がホテルに泊まる一方、民泊も17%にのぼる。「民泊の影響が想定以上

に大きくなっている」と大阪市内の大手都市ホテル幹部は肩を落とす。日本アニメの舞台や映画のロケ地を訪ねる「聖地巡礼」など体験型の「コト消費」が訪日客の間で人気になっていることも、旅行先が地方に分散し東阪ホテルの稼働率が弱含みで推移する背景にあるとの見方もある。

都内18ホテルの11月の稼働率は1・1%の微減だったが、ビジネス需要が好調で平均で87%と高水準を維持した。12月の稼働率は84・4%と0・6%上昇した。大阪市内の主要12ホテルの12月の稼働率は91・0%と前年同月比1・3%下がった。